



長所・短所の欄って必要ですか？

今年は、明が8月から12月まで長野県の公立高校に留学していますので、ドイツと日本の学校についていろいろ考えを巡らせています。そのことについて今回書きました。

明が日本の高校に半年留学することになった際、学校からプリントの提出を求められた。そのプリントには名前や住所、年齢のほか、自分の長所と短所を書く欄があった。

「ボクの長所と短所か…。何があるかな」と明は考え、長所として「すぐ理解することかな」と言った。例えば量子やプラズマなど、説明してもらうとすぐ理解できるから。だから「ものごとの理解が早い」と書いた。次は短所である。

私の妹や小6の甥っ子もいたので、一緒に考えもらつた。おならが臭いとか、寝起きが悪いとかいろいろ出た。「都合が悪くなると猫の真似をしてごまかすことかな」「いや、それは書けないだろう」「ご飯を食べるのが遅いこととか」「それもなあ」などと言い合つて、なかなか思いつかない。

すると明が「ぼく、短所ないよね！」と言つた。すると小6の甥っ子も「うん、あーくん（明のこと）には短所ないよ」とうれしそうに断言。私の妹も「ほんとだ、思いつかないね」と同意した。

これは衝撃だった。日本で生まれ育つ私にとって、謙虚であることは美点であるから「自分には短所がない」と自分で言うのは選択肢はない。「短所は多く、長所は少ない。けれど短所を自覚し、克服しようとしている」というのが日本で求められるパターンである。それをドイツ生まれドイツ育ちの息子はあっさりと「自分に短所はない」と言い切るのだ。

しかし、学校は短所を書くことを求めて、この欄は短所がないことを想定していない。短所がないと思ったらどうしたらいいのだろう？

そして思った、どうして短所を書か

せる必要があるのだろうか、と。自分の短所など考えたことのない子は、わざわざ頭をひねって自分の悪いところを思いつかなければならない。それに何の意味があるのだろうか。

明は状況を観察するのは得意だが、行動に移すには時間がかかる。いわゆるおとなしいタイプである。自己主張ができず貧乏くじを引かされることもたびたびだし、悔しい思いをしたこともある。反面、小学校時代は黒一点で女の子の誕生日会に呼ばれ、本人も喜んで出かけていた。攻撃的でなく、威圧感を与えないタイプだからだろう。

幼稚園では女の子の言われるままに何でもしていて、先生から「自己主張がない」と批判されたこともあったが、本人たちがそれで楽しくやっているのだからいいだろうと思っていた。もちろん言いたいことを言えずにチャンスを逃したり、初対面の子と遊ぶのに時間がかかるが、それがなんだというのか。親が「活発にしなさい」と言えば、活発な子になるわけでもあるまいし。その子にないものを、いろいろ言って伸ばそうとしても何も生まれない。

いろいろ考えた挙句、短所の欄に何も書かないわけにはいかないので「うっかり忘れ物をすることがある」と書いた。確かに事実であり、よくない。けれどそんなことを言い出すと「朝なかなか起きれない」とか「部屋が散らかっている」とかいくらでも書ける。こんなことを書かせたいのだろうか。

プリントを提出後、もしやと思った。この欄には「長所：優しい」「短所：怒りっぽい」など性格を書かせたかったのではないか。ドイツで長所短所を書かせる項目など見たことがなかったので、日本的な感覚を忘れていた。

大学生の子どもが二人いる友人にこの話をしたら「小学校のときからそう。入試でも就職活動でもそんなことばかり書かれるよ。どうせ誰もチェックできないんだから、子どもたちは一番受けそうなことを書いているみたい。怒りっぽいのは短所だけど、それをバネにして頑張っているから長所でもあ



松葉杖の明。成長に伴う痛みが長く続いていたため10月初めに日本で簡単な手術を受けて、11月末まで松葉杖の生活になりましたが、楽しく長野の高校に通っています。

10月末に学校から2泊3日で東京研修に行って、松葉杖で15000歩も歩いた日があったそうで、足より手がしびれたそう。

るとか、フォローも書くのよ」と言う。

そういう空疎なことがまかり通っているのかと驚いた。「短所を自覚して、克服する努力をしている」というストーリーを作らねばならない。そんなことにエネルギーを費やすなんて。

明確な基準がはっきりしない中、さまざまな面接マニュアルが出回っている。そもそも就職活動では、その人が学んだことや能力よりも、疑問をもたずに命令に従うか、すなわち社畜になれるかという点が重要視されているように感じる。学業に関係なく、性格やこれまで頑張ってきたことを細々書かれるなんて、学生も大変だ。

子どもの性格を知りたいのなら、長所短所ではなく「自分の性格」という欄にすればいい。良し悪しという判断を入れず、ただ事実を書く。性格は明るければいいというものではないし、おとなしいのは悪いことではない。

明るいのがよくて、暗いのが悪いとは限らない。それを押し付けているのは大人である。判断せず、決めつけないことが、相手をそのままを受け入れることであり、多様性を認める社会への第一歩になる。まずは学校から長所と短所の欄をなくしてほしい。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂